

バレンタインスペシャル2012

sanukisoba

露天風呂は稀に見る猛吹雪のせいで苦行としか思えないような様相を呈していて、それでも僕らはそこそこ楽しんでた。

卒業旅行の行き先に選んだ地は秋田。沖縄からうちの大学に来た信宏が、卒業までに一度で良いから雪で遊びたいと主張したからだ。彼は卒業してからは再び沖縄に戻り地元で働くことが決まっている。下手すると人生で最後のチャンスになってしまうというのが彼の言い分だ。そんな熱心な説得により、信宏、僕、隆明の男3人と柳さん高橋さんの女2人しかいない佐久間ゼミの4年生は2泊3日の予定で秋田を訪れていた。

昼過ぎに新幹線からぽいっと放り出され、えっちらおっちらと走るバスにゆられて温泉にたどり着いた頃には雪が降り始め、信宏は見たこともないくらいの深い雪に感動しっぱなしだった。僕らも東京では見ることのできないような銀世界に興奮していたけれど、それを悟られまいと「きっと今日のこの経験は信宏を大人にするんだね」などとからかってごまかしてしまうくらいの雪だった。

部屋に荷物を置くと、信宏が散歩したいとせがむので宿の外を散策することに決めた。声をかけてみたところ女子2人は早くも温泉に入りたいらしく、食事の時間になったら部屋に行くねーという元気な声を背に僕らは宿を出る。信宏は仲居さんの「吹雪になりそうだからあまり遠くに行かないほうが良いですよ」というアドバイスでさらに期待が高まったらしく吹雪への思いをはせながら靴紐を締めなおしていた。

宿の近くを歩きながら信宏は途中吹き溜まりに足を入れてみたり、危ないぞと注意する僕らも気にせず道路わきの足跡もない雪面に飛び込んで人型を作っては楽しんでた。スキーやスノボには何度も誘ったし企画もしたのだが結局信宏が「怖い」といって実現しなかったが故に人生初の豪雪とのご対面が大学生活最後の旅行になってしまったのだが、それにしても恥ずかしいくらいのはしゃぎようだった。ハタチを過ぎてもここまで雪で興奮できるなんて面白いな、と僕らは笑いながら信宏の後をついて歩いた。

結局最後の方は信宏が投げた雪球をきっかけに雪合戦が始まってしまい3人とも雪にまみれて帰ってきた。つまるところ僕らはみんなバカなのだ。

宿で食事をとるところには雪は本当に吹雪に変わり、寒いから障子を閉めろという隆明の文句にも耳を貸さず信宏は窓から見える吹雪と食事を楽しんでいた。

隆明は来年から違う大学の院に進学を決めており、僕は就職。高橋さんは同じ大学の院に進学で柳さんは、わからない。

僕ら男3人と高橋さんは一緒にいることが多い。彼氏の浮気が発覚したときはなぜか僕ら3人が信宏の下宿に呼び出され愚痴なんだか説教だかなんだかわからない 高橋さんの独演会を3時間聞かされ、その後夜が明けるまで高橋さんをなだめ、男3人でご機嫌をとることに苦心したこともある。でも、柳さんはいまいち接点が少ない。

ゼミが終わると僕らは3年生もつれて食事に行くのだが、柳さんは3年生がいるときは基本的に参加しない。4年生だけで集まるときはちょくちょく参加するのだが、参加しても特に自分のことを喋るわけでもないし、聞いても悪いのかなと僕らはしり込みしてしまうから結局彼女のことを僕らはよく知らない。

いつだか高橋さんに柳さんについて聞いてみたのだが、高橋さんと2人でも普通に会話ができるけどあまり自分のことは話さないから私も知らない、とあっさり返されてしまった。そもそも高橋さんが自分のことをしゃべりすぎるから柳さんが話をできないだけなんじゃないの、と僕は今でも思っているのだが。

柳さんは特に暗いわけでもないしおとなしいわけでもない。見た目では高橋さんの方が暗そうな印象を受けるくらいだ。ただ、自分のことを喋らないだけ。それが柳さん。

実はそのことを知るにいたったのは、僕が柳さんと2人で何回か会っているからなのだ。デートというような色っぽい話ではなく、僕が図書館で本を選んでいるときに柳さんと偶然会って、なんとなくそのままお茶でもしようか、という流れになっただけのお話。もしかしたら信宏や隆明ともそのように会っているのかもしれないが別にそれを確かめようとは思わないし、やつらからそんな話を聞いたこともない。

じゃあ柳さんと会っているときどういう話をするのかというと借りた本の話や読んだ本の話くらいで結局のところ世間話くらいしか僕も柳さんとはできていない。

食事も終わり僕らはその日初めての温泉に、高橋さんと柳さんは一度自室に引き上げて僕らが風呂を上がってから再び合流して酒でも呑もうということに。温泉に入る頃には吹雪も少しおさまり、パラパラと落ちてくる雪を眺めながら露天風呂を堪能した。

どうせこの後お酒を飲むのだしのぼせてもつまらないし、と風呂をそこそこに切り上げて部屋に戻る頃外はまた吹雪模様に。僕は若干長い浴衣の裾を気にしながら、無駄に暖かい宿の廊下を進み自動販売機で何本かジュースを買って部屋に戻った。柳さんは確か酒が呑めなかったはずだ。それくらいの気配りをする余裕は僕にもある。

酒が順調に減り残りの量と反比例して気分が良くなっていく信宏と高橋さんは、旅先ということもあってか、それとも大学最後ということもあってかいつもより遠慮がなくなり隆明や僕らへの攻撃を強めてきた。なぜ隆明は毎年彼女が変わるのか。なぜ僕は大学2年以降彼女を作っていない

のか、女に興味はないのか。なぜ高橋さんは男を見る目がないのか、なぜ信宏は未だに高校時代からの彼女と遠距離恋愛が続いているのかなどなど。下世話な話を好む高橋さんとお調子者の信宏がこんなに根掘り葉掘り直接的に聞いてくるのは珍しいものだから僕と隆明は内心驚いた。だから高橋さんが柳さんに絡み始めたときは「大丈夫かよ」というよりはむしろ「お、いったか」という印象の方が強くて、僕らは高橋さんに便乗して皆で柳さんに詰め寄っていた。若干酔っている僕と隆明、べろんべろんの高橋さんと信宏に興味本位の質問ばかりされた素面の柳さんは特段嫌がる様子もなく飄々と僕らの質問をかわし、それがまた高橋さんの好奇心に火をつけてしまった。

高橋さんは柳さんを羽交い絞めにして「男性遍歴を晒さないといたずらすぞ！」と宣言し、高橋さんの攻撃力の前に僕と隆明はなすすべがなく、信宏は「これエロい！これかなりエロい！」と笑っていた。酔っ払うとなんだか人間ってよくわからんなあ、と隆明は僕に言いながらつまみの柿ピーのピーナッツだけを熱心に食べはじめた。僕は余る柿ピーを食べることに決め、女の子と信宏の騒動を眺める。

ゼミで隆明たちと知り合ってから3ヶ月くらい経ったころ、僕の友人は柳さんに告白をしてフラれている。柳さんと少人数の授業で一緒になった友人は一目ぼれをしまいどうしようか悩んでいたのだけれど、学期も終わる頃であればその後授業もなくお互い気まずい思いもしないだろうからと考えに考えて告白を決行した結果「ごめんなさい」の一言で終わってしまったらしい。

柳さんに彼氏がいるのかなどさんざん問われ、毎回わからない、知らないとしか言えなかった僕としては若干友人に申し訳ない気もしたし、もっと熱心に僕が橋渡しをしていたらもう少しいい結果になったんじゃないかなどと思わないわけでもなかったが、フラれた理由がわからない以上は想像でしかないし、僕も友人も告白に失敗して落ち込むほど初心でもなかった。

柳さんの彼氏というのはゼミの中でも度々持ち上がる話題で高橋さんを中心とする下世話メンバーは柳さんのいないところで色々議論を闘わせていたのだが、柳さんが女というところは見かけても男というところは見ることがないというメンバーが圧倒的多数であったため柳さんは男に興味がないのではないかと、もしかしたら年上のオジサマと交際していてガキには興味がないんじゃないかなどと様々な仮説が唱えられた。

どれも否定する要素に欠けたため、他人の妄想のせいですます柳さんにまつわる謎はますます深まり、不思議な人という地位を確立する結果になってしまった。

時計が2時を回る頃、信宏は部屋の隅で丸くなって寝息をたてていた。隆明と僕は最近のラーメンの値段の高さについて激論を交わし、高橋さんは柳さんに美味しい卵かけご飯の作り方をレクチャーしていた。

「2時かぁ」と隆明が時計を見てつぶやくと、高橋さんは何かを思い出したように「すぐ戻る」と言い残し部屋を出て行った。飲み物買って来る、と隆明までもが出てしまったので僕と柳さんが部屋に残される。まどろんだ空気の中でポッキーを食べながら柳さんにも勧めると、それを受け取りながら彼女が「で、なんで彼女作らないわけ」と僕に問いかけてくる。まだその話か、と苦笑しながらわからないし柳さんこそどうなんだよと問い返すと彼女はハハ、と笑いポッキーをかじった。

まもなく、紙袋を持った高橋さんとコーラを持った隆明が部屋に戻ってきた。高橋さんは信宏を起こし、僕の横に座らせると紙袋から包みを取り出し「はいバレンタイン。柳さんと私から」と僕らに渡してきた。

「こういうイベント的なこと一切しないゼミだったよなぁ」と隆明は言いながらせっかくだから一緒に食べようと提案し、包みをとき始める。大学生生活通産2個しかももらえなかったなぁ、と僕がつぶやくと高橋さんに大笑いされた。

チョコレートを食べ終わる頃には外は吹雪がひどくなり、信宏は再び深い眠りへ。高橋さんと柳さんもそろそろ寝ようか、と言い出したのでとりあえず初日はお開きにして、僕と隆明はせっかくの猛吹雪だし、露天風呂にでも行ってみるかということになった。実はその日の吹雪は稀に見る猛吹雪で、そんな中で露天風呂なんて物好きな人だと翌日仲居さんに笑われたのだが。

露天風呂は、稀に見る猛吹雪のせいで苦行としか思えないような様相を呈していて、それでも僕らはそこそこ楽しんでいた。前も見えないし息もろくにできない、風に音もかき消され、わかるのはお湯の温かさとぼんやり光る電灯だけ。怒鳴るようにして隆明とラーメンの話の続きをして、結局疲れ始めたので僕はあがることにした。隆明はもう少し入っていく、と内風呂に残った。

部屋に戻り、信宏に布団をかけてやってから障子を閉める。暖房を控えめにしてから何気なく携帯を手にとったちょうどそのときメールが届く。携帯を開いてみると柳さんからで、何か忘れ物でもしたのかなと思って読んでみる。

一2年生から彼女いないってのはホントだったんだね。もっと早くから確かめてればよかった。せっかくのバレンタインだからお伝えしておきます。私、あなたのことが好きですよ。ゼミで知り合った頃から。一目ぼれ。私と付き合ってくれるなら、大学生生活3つ目のチョコをあげるから呼び出してねー

僕は柳さんのことをよく知らないけれど、たぶんチョコはもらいに行くんじゃないかと思う。それからでも遅くはないだろう。僕は自分でもわかるくらいニヤニヤしながら寝ている信宏に「起きてればよかったのに」と声をかけてから、電話をかけながら部屋を出る。